

## Ernest Hemingway の自殺をめぐって

宮 田 満 雄

1961年7月2日早朝、Ernest Hemingway は愛用の散弾銃で自らの額を撃ち抜き、世界中に大きな驚愕をあたえてこの世を去った。E. Rovit はその二年後に出版された著書の中で、Hemingway の晩年に関する詳細は、おそらく決して知らされないであろうと述べた。<sup>1)</sup> その理由は、自らの私事に関しては、その最盛期においてさえ固く閉ざして語ろうとしなかった Hemingway であった故に、たとえその死後であっても、病める晩年の姿が衆人の前に晒される可能性はなからうと言うのである。

1961年春、Mayo Clinic において、入院中の Hemingway に四日間親しく接した D. R. Wolfe 牧師は、ほとんど正常な域を越えたかに見えた彼の様子を伝えている。<sup>2)</sup> この状態が電気ショック療法などの結果起った一時的な現象か、それとも更に重大な原因に基づくものであるかは師にも判断のつかないことであった。

Hemingway の晩年に関する詳細は、1969年に出版された Carlos Baker の *Life Story*<sup>3)</sup> によって明らかにされているが、この偉大な作家の自殺については、多くの研究者達の間では、「起るべくして起ったこと」として受けとめられていることは作家論的な意味において重要な点である。<sup>4)</sup> しかしながら、磊落で男性的なイメージをもってその作品に接してきた世界の多くの読者達にとっては、この作家の自殺はやはり大きなショックであった。この小論においては、彼の自殺をめぐる問題について論じてみたい。

## I

Hemingway と「自殺」とはもともと決して無縁なものではない。彼の周辺で、自殺と言えば誰でも思い出すのは1928年に起った彼自身の父親の自殺であるが、それ以前に出た彼の作品の中にすでに自殺の問題が顔を出していることは、作家の死に様を考え合わせると興味深いと言うよりも、むしろ、無気味な位である。

彼の最初の短編集 *In Our Time* の冒頭を飾る 'Indian Camp' は、文体的にも、又、内容的にも、最も彼の特長を表わした作品として論じられてきているが、この作品のクライマックスにインディアンの夫の自殺が配されており、幼い Nick に生と死の世界への initiation をあたえていることは周知の事実である。仕事を終え、静かな湖面を渡って行くボートの中で交される次の父子の会話の中に、作者の最後を考え合わせると、人生の皮肉を感じざるを得ない。

'Why did he kill himself, Daddy?'

'I don't know, Nick. He couldn't stand things, I guess.'

'Do many men kill themselves, Daddy?'

'Not very many, Nick.'

'Do many women?'

'Hardly ever.'

'Don't they ever?'

'Oh, yes. They do sometimes.'

'Daddy?'

'Yes.'

'Where did Uncle George go?'

'He'll turn up all right.'

'Is dying hard, Daddy?'

1) Cf. Earl Rovit, *Ernest Hemingway*, Twayne Publishers, Inc., New York, 1963, p. 28.

2) Cf. *Ibid.*, p. 177

3) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story*, Scribner's, New York, 1969.

4) Cf. E. Rovit, *Ernest Hemingway*, p. 28. 又, Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, Pennsylvania State U. Press, University Park and London, 1966, pp. 2-3.

‘No, I think it’s pretty easy, Nick. It all depends.’<sup>5)</sup>

丘のむこうから太陽が昇りはじめ、一匹の魚がはねて湖面に波紋をつくっていく朝の静寂の中で、Nick と Dr. Adams はさりげなく人間の死、それも自殺について言葉を交わしている。父親の言葉にも示されているように、自殺というものは決して正常なものではなく、世の中で自殺を計る人の数は、男でも ‘not very many’ であり、女性に至っては ‘Hardly ever’ ということになる。それでも自殺を計る人が居ることは否めない事実であり、その理由を父親は、「よくわからないが、きっと我慢できなくなったからだろう。」と言うのである。Nick はボートの艦に坐って、「自分は決して死ぬものか。」と、密かに思う。

この二人のモデルになっているのは、明らかに Hemingway 自身とその父親であるが、この両者共が、上述の作品の中では極めて稀なこととして話し合われている死の形をとってこの世を去ったことは全く皮肉である。Philip Young もこの件に関して、“Thus Hemingway’s life ended where his fiction had begun—had begun with a ‘forecast’ so unintentional and obscure that only hindsight has chillingly felt it as an omen.”<sup>6)</sup> と、この作家の最初の作品が、作家自身の人生における終局を暗示する結果となったことの不思議さ感慨をこめて述べている。

Hemingway の父親が自殺したのは、1928年12月6日のことであった。Ernest の祖父から譲り受けた南北戦争記念の Smith & Wesson の拳銃を使用したのだが、その後、この拳銃は Ernest の手に渡ることとなった。父親は、自殺の一年前、すなわち、1927年に糖尿病と診断された。このことは、医者として常に健康を誇った生活を送って来た本人にとっては大変なショックであった。<sup>7)</sup>

その後、療養のため、しばらくフロリダへ出かけ、その間に Ernest との和解も成立し、<sup>8)</sup> 往診も続けることが可能になっていたが、狭心症にもかかり、更には壊疽をも併発するところとなった。これに加えて、フロリダに買い求めた土地代金支払いの問題が起って精神的にも極度に疲労するところとなり、12月6日正午頃、往診から帰宅し、「昼食ができれば呼んでくれ。」と言い残して自室にこもりピストル自殺を計った。父のこの死は Ernest の心に大きな傷跡を残し、戦争の後遺症に加えて、彼の精神生活に重い負担をかけることとなった。

自殺という行為は、伝統的なキリスト教社会にあっては大きな罪悪の一つであった。人間の生命は、神から授けられた賜物であるという認識に立ち、従って、自らの意志によってこれを絶つということは神に対する不従順であり、又、不信仰のあらわれとして考えられていた。従って、Dr. Hemingway の死が、当時のオーク・パークの人々に与えたショックは大きなものであったと言わねばならない。教会の有力な役員であり、社会的にも高い信望を得ていた人物であっただけに、町の人々の心理は複雑であった。弟の Leicester は次のように記している。

Father’s impending funeral provided a situation most of us would have liked to skip. He had been a deacon of the Church, knew intimate details of the lives of many of the parishioners, and in the narrow-minded hypocritical view of many local residents, had disgraced himself pretty thoroughly by committing suicide. Emotional illness was very little understood even thirty years ago.<sup>9)</sup>

以上のような周囲の雰囲気に対して、Ernest は激しい憤りをおぼえ、葬式にのぞむにあたり弟に対して次のように申しわたしていた。

5) *The First Forty-Nine Stories*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 99.

6) *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, p. 263.

7) Cf. Marcelline Hemingway Sanford, *At the Hemingways*, Atlantic-Little, Brown, Boston, 1962, pp. 225—234.

8) Ernest と家族との関係は冷たいものであり、特に、*In Our Time* が出版された時、その材題がキリスト教信者の家庭に育った者として恥ずべきものであるというので父親の激怒をかかっていた。

9) Leicester Hemingway, *My Brother, Ernest Hemingway*, The World Publishing Co., Cleveland, 1962, p. 111.

At the funeral, I want no crying. You understand, kid? There will be some others who will weep, and let them. But not in our family. We're there to honor him for the kind of life he lived, and the people he taught and helped. And, if you will, really pray as hard as you can, to help get his soul out of purgatory. There are plenty of heathens around here who should be ashamed of themselves.<sup>10)</sup>

以上のように、父親の死に対しては同情を示してはいるものの、彼の作品においては、自殺はやはり人生における規則違反として考えられており、Rovit の次の言葉はそれを裏づけている。

Suicide appears in most of Hemingway's works as a complete abrogation of the rules of the game. It is even worse than dying badly, which, is in accordance, at least, with the rules.<sup>11)</sup>

*Winner Take Nothing* (1933) の最後に収録されている 'Fathers and Sons' の中に、彼が父親の死をどのように考えていたかが記されている。

Like all men with a faculty that surpasses human requirements, his father was very nervous. Then, too, he was sentimental, and, like most sentimental people, he was both cruel and abused. Also, he had much bad luck, and it was not all of it his own. He had died in a trap that he had helped only a little to set, and they had all betrayed him in their various ways before he died. All sentimental people are betrayed so many times.<sup>12)</sup>

ここにおいては、父親の死が不運の結果であってその不運に関してはかならずしも全面的に彼が責任を負うべきものではなく、いわば、罠にかかったも同然であると述べ、父親は、むしろ、人々に裏切られた被害者としてとらえられており、極めて同情的である。

しかしながら、*For Whom the Bell Tolls* においては、父親の自殺について先の 'Fathers and Sons' に示されているのとは全く異った厳しい批判が記されている。

主人公 Robert Jordan は、いよいよ橋梁爆破の作戦実行を明日に控えた夜、ともすれば高ぶりがちな心を過去の様々な思い出の中で紛らわそうとしている。彼は父親が自殺に使用した Smith & Wesson の拳銃のことを思い出す。父親が自殺したあと、実際に彼が譲り受けた例の臼くづきの拳銃のことである。この作品の中では、検屍官が本来没収しなければならない筈のこの拳銃を、"Bob, I guess you might want to keep the gun. I'm supposed to hold it, but I know your dad set a lot of store by it..."<sup>13)</sup> と言って返してくれる。Robert は、ある日この拳銃を持ち出し Red Lodge の上にある高地の湖まで行って、湖を見下す岩の上に立ち、そこからこの拳銃を投げ落す。拳銃は泡を立てて沈んで行き、澄み切った湖水の中に消えて行った。それを見届けた後、彼は老馬 Bess に拍車をかけ、父親の死によって受けた傷手をふり切ろうとするかのように湖岸を駆けまわる。

祖父への思慕は、いつしか畏敬と憧憬に変わって行くのだが、父親のとこを思い出すと、その意気地なさが思い出され彼の心は乱れる。祖父は南北戦争の勇士であり、Robert にとっては英雄であった。彼も今は与えられた命令を冷静沈着に果そうとしている、いわば、勇士である。彼は、今この時にあたり、もし来世で祖父と父親と彼の三人が会うようなことがあるとすれば、祖父と自分は、父親の前で耐え難い気まずさを味合うだろうと思う。何故ならば、父親は自殺をするような意気地無しだったからだ。彼は父親の自殺について "Anyone has a right to do it... But it isn't a good thing to do. I understand it, but I do not approve of it. *Lache* was the word..."<sup>14)</sup> と考える。ここにおいて、Hemingway は Robert を通してはっきり、「自殺は認めない。その行為

10) Ibid., p. 111.

11) *Ernest Hemingway*, p. 29.

12) *The First Forty-Nine Stories*, p. 461.

13) *For Whom The Bell Tolls*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 317.

14) Ibid., p. 319.

は *Lache* (恥辱) だ。」と述べている。更に Robert は, “I’ll never forget how sick it made me the first time I knew he was a *cobarde*. Go on, say it in English. Coward.” と述懐して自分の愛してやまなかった父親が憶病者であったことがわかった時のあのショックを今一度いまましく思い出すのである。祖父のことを考えている間は調子よかったが、一旦父親の思い出になると彼の調子はおかしくなってくるのであった。

15才以後は、父親と何の関係もなくなっていたと書いた Ernest ではあったが、<sup>15)</sup>「憶病者」と心の中では罵りながらも、実際は, “He understood his father and he forgave him everything and he pitied him but he was ashamed of him.”<sup>16)</sup> というのが彼の心情であったのだ。理解と同情と屈辱、この交錯した気持は、苦しい心の重荷として Ernest に一生つきまとったことであろう。この悲しく交錯する気持は、*In Our Time* (1925) の中に収録されている “My Old Man” の主人公 Joe の悲哀と一致するのも不思議な偶然であろうか。

## II

哀れなインディアンの子の自殺を目撃した Nick は、「自分は決して死ぬものか。」と密かに心に誓った。又、Robert Jordan は、父親の自殺に対して理解は示しつつも、なお、恥ずべき行為としてこれに反発する。最後まで耐え忍ぶのが Hemingway の主人公達の生き方でなければならなかった。

‘A Clean, Well-Lighted Place’ に登場する老人は、「先週」首をくくって自殺を計ろうとした老人である。しかし、彼の筆がそれをいち早く発見して老人は一命を取り止めた。一命を取り止めたとは言っても、すでに80才位になっているこの老人にとっては特にこれといってすることはない。彼の自殺の原因についてカフエのウエイターは、“He was in despair.” と言っているが、特

に何に絶望したのか具体的なことは不明である。孤独に耐えかねたのかも知れない。自殺に失敗した今となっては、彼に残された唯一の道は生き続けていくことであり、老人はそうすることに決心したのであろう。彼の不確かな足どりにもかかわらず一種の威厳さえ備えている。作者の愛情と同情がこの老人に注がれているように感じられる。これにひきかえ、思春期の欲望に悩まされた結果自殺した16才の少年は “a goddamned fool” と考えられている。<sup>17)</sup>

以上のように見てくると、Hemingway 自身の生き方の中からは自殺など考えられないように思われる。しかしながら、作中人物を通して示されている自殺に対する否定的な態度は、かならずしも Hemingway 自身の生き方とは一致しない面があることが指摘されている。

Hemingway は、Georges Schreiber が編集した *Portraits and Self-Portraits* の中に、自ら投稿して何故に自分が狩猟に熱中するのか、その必然性を次のように記している。

Since he was a young boy he has cared greatly for fishing and shooting. If he had not spent so much time at them... he might have written much more. On the other hand, he might have shot himself.<sup>18)</sup>

これは、*Green Hills of Africa* が出版された一年後に書かれたものであるが、「狩猟にあれ程時間を費やしていなければ、もっと多作であっただろう。」という彼の言葉を、Richard B. Hovey は作家自身の自己弁明であるとし、「反面、自殺していたかもしれない。」という言葉の中に、Hemingway が本質的にその性格の内に秘めていた危険な側面を認めている。つまり、特に1930年代前半は寡作な時期であり、スペイン、アフリカと旅行に多くの時間を費やしていたが、上述の Hemingway の狩猟に関する弁明は、この時期の彼の内面的克闘をよく示しており、又同時に、自殺の可能性を公言する病的な精神状態をも表わしていると言うのである。<sup>19)</sup> Hemingway がそ

15) Cf. *The First Forty-Nine Stories*, p. 468. (Fathers and Sons)

16) *For Whom the Bell Tolls*, p. 320.

17) *The First Forty-Nine Stories*, p. 366. (God Rest You Merry, Gentlemen)

18) Georges Schreiber, *Portraits and Self-Portraits*, Houghton Mifflin, Boston, 1936. p. 57.

19) Cf. Richard B. Hovey, *Hemingway: The Inward Terrain*, U. of Washington Press, Seattle and London, 1968, p. 117.

の身を絶えず危険にさらして来たことは周知の事実であり、戦争が終了した後は闘牛に生死対決の臨場感を求め、又、狩猟においてその危険を追求したわけであるが、その彼が、猟銃で自殺してしまった現在 Hovey の次の分析には説得力があるように思われる。

Now that we know Hemingway so often exposed himself to danger and injury—we manifestly accident prone, and did kill himself with a hunting gun—we cannot help seeing *Death in the Afternoon* and *Green Hills of Africa* as the writings of a sick spirit.

In this period of his career, Hemingway can no longer manage his neurotic impulses, as he had been able to do in the earlier fiction. . . Writing stories and novels no longer provides the needed release, nor does all his empathy with the bullfight. He himself must face and kill dangerous animals in pursuit of a violence that is “necessary”, compulsive. He can preserve his integrity as artist-hero, he can assert his manhood, only by conquering big beasts.<sup>20)</sup>

狩猟をすることは、もはや Hemingway の趣味ではなく、不安定な作家の神経症の性格に基づく不可欠な行為となっていたと言う Hovey の分析は、Hemingway 自身に対しては残酷な気もするが、伝記的事実によって彼の自虐的な傾向は明らかであるし、上述の如く、彼の自殺が起きる約30年前にその可能性を公言しているところなどから判断して、この分析は必ずしも穿ち過ぎであるとは言えないものを持っていると思う。更に、Hemingway の自殺が決して偶然のものではなかったことは、Carlos Baker もしばしば言及しているところである。Hemingway がフオッサルタの前線で致命的な負傷をしたのは1918年であった。彼が20才にも満たない若い身を自ら好んで

生命の危険にさらしたこと自体が、背後に潜む重大な問題を感じさすものであるが、とにかく、彼はこの負傷した時に、多くの死傷者に囲まれて、生きるより死んで行く方が自然に思われたと後に告白したことが伝えられている。<sup>21)</sup>

1921年12月、*Toronto Daily Star*、及び、*Toronto Star Weekly* の特派員として渡欧したが、1923年9月にはトロントに戻って来た。翌年1月に再渡欧するまでのトロントにおける三ヵ月間は、彼にとっては惨めなものであったようである。その主な原因は、新聞社の仕事に追われて、自分の作品を書く時間がなかったことであった。従って、パリの生活が恋しくなったようである。彼は、同僚の女性記者、Mary Lowrey に、「この三ヵ月は、自分の文学者としての10年間に相当するものを台無しにしてしまった。」とこぼしている。戦後復員して不眠症に悩まされ続けた彼がこのように新聞社の仕事と自らの文学活動との板ばさみになり、自殺をしたくなる人の気持ちが分かると思懐したのも理解できるような気がする。

He understood now why men could bring themselves to commit suicide: it was simply because of so great a pile-up of things to be done that they could not see their way clear of the tangle.<sup>22)</sup>

“Why did he kill himself, Daddy?” と無邪気に質問した Nick の姿が対照的に思い出される。

1926年、パリに在住していた Hemingway は、仕事などで疲れてくるとしばしば自殺について考えており、又、友人達と「死に方」について会話を交していることが指摘されている。<sup>23)</sup> 更にこの年には、Hardly との離婚問題、Pauline との再婚問題があり、彼はしばしば不安定な精神状態に陥った。結婚問題が片づかなければ自殺するつもりであったと Pauline 自身に告白している。<sup>24)</sup>

結婚問題が片づいた時、Ernest は Fitzgerald に対して、自殺しなければならぬような局面が無事に過ぎたことを告げているが、<sup>25)</sup> それから

20) Ibid., p. 117.

21) Cf. *Ernest Hemingway: A Life Story*. p. 45.

22) Ibid., p. 119.

23) Cf. Ibid., p. 167.

24) Cf. Ibid., p. 176.

25) Cf. Ibid., p. 178.

6年後の1932年、以然として、「周囲の情況次第では、いつでも自殺する。」と述べている。<sup>26)</sup> 自らの死の問題は、常に彼の内面に存在していたようで、Bakerも“Premonition of possible death struck him periodically like twinges of rheumatism.”<sup>27)</sup>と述べ、この事実を裏づけている。

1936年は、スペインの内乱が起き、彼自身もスペインに行くべきか否か迷った頃であるが、その頃にも何人かの友人に自らの死のことを打ち明けている。

He confided to Marjorie Kinnan Rawlings his feeling that he would soon die, though he would much prefer to become a wise old man, wearing a white beard and chewing tobacco.<sup>28)</sup>

又、更に、Mac Leishには手紙の中で、自分は生きることをこよなく愛しているので、自殺をしなければならぬ時期が到来したら自分にとっては“big disgust”であると書いている。<sup>29)</sup>

この年は、彼の三度目の結婚の相手となる運命をになった Martha Gellhorn がキーウエストにやって来て、彼の家に寄寓することになった年であり、自殺の仕方について作品の中でたびたび言及したりしている。この年の8月と9月にそれぞれ雑誌に発表された‘The Snows of Kilimanjaro’<sup>30)</sup>と、‘The Short Happy Life of Francis Macomber’<sup>31)</sup>の両方共、その主人公が死んでいくのも、この頃の彼の精神状態を反映するものとして興味深いものがある。

1939年、サン・ヴァレーにおける彼を中心とした夜の団欒の話題にも自殺のことがとび出し、集った客を驚かしたり、又、彼の少年時代が悲劇的なまでに不幸なものであったことなどをしみじみと語り、周囲の者達を当惑させている。<sup>30)</sup> その翌年の10月に *For Whom the Bell Tolls* が出版されたわけであるが、この作品の校正をサン・ヴァレーの自宅で行っている時も、父親の自殺のくだりに至って、彼は自ら ‘common sense view

of suicide’ と呼んでいた考えを皆に雄弁に語り、散弾銃で、どのように自殺をするのか、その方法を注意深く銃を手にしながら Martha に見せたという。ここでも彼は、状況がどうにもならなかった時には自殺が許されるべきことを説いている。<sup>31)</sup>

1950年の前半は、欧州への旅行で多忙な時期であった。6月にハバナに戻って来て、7月1日に *Across the River and Into the Trees* の校正が終わったのを祝って、彼の四度目の妻となった Mary と、他に二人を伴い、持船 Pilar に乗って三日間の釣りに出かけた。この時、港に投錨することになり、彼がブリッジに登って行こうとしている時、大波を避ける為に舵手が船の向きを大きく変えた為に下のデッキに振り落され、魚鉤を留めてある大きな留金に頭を強く打ちつけ負傷した。このことが大きな原因の一つとなり、その後気分がすぐれず、焦躁感や頭痛に見舞われ、再び自殺の可能性をほのめかしたりしている。時には冗談めいていたこともあったが、かねがね状況が悪くなった時には自殺も辞さないと言っていた彼のことであるから本音であろう。

この年に出版された *Across the River and Into the Trees* の批評界における評判は、あまり芳しいものではなかったが、心臓が悪くて余命いくばくもない運命にある主人公、合衆国陸軍大佐の持つ感傷と孤独と寂莫感は作家自身のそれであり、当時の彼の精神的、肉体的条件を考慮に入れると十分同情すべき点がある。むしろ、当時の Hemingway が、主人公として創造し得たのは Cantwell 大佐しか居なかったという事実を重く見たい。

1954年のウガンダにおける飛行機事故は、彼に致命的な打撃を与えた。彼が九死に一生を得たことにより、彼の不死身のイメージは益々大きく世界の人々に焼きつけられたが、実際に彼が受けた肉体的、精神的痛手は、想像以上に深刻なものであった。それでも彼は、その後1959年に再び夫人

26) Cf. Ibid., p. 232.

27) Ibid., p. 293.

28) Ibid., p. 293.

29) Cf. Ibid., p. 293.

30) Cf. Ibid., p. 344.

31) Cf. Ibid., p. 352.

同伴でスペインを訪れた。しかしながら、この旅は正にCantwell大佐のスペイン感傷旅行とでも言うべきものであった。傷つき、年老いた Hemingway にとっては、かつてあれ程魅せられ、“.

the fiesta exploded. There is no other way to describe it.”<sup>32)</sup> という興奮に充ちた描写で描き出したパンプローナの祝祭も、最早取るに足りないものであり、“all the overcrowding and the modernization at Pamplona meant nothing.”<sup>33)</sup> となっている。又、闘牛についても、“I had lost my old feeling for the bullfighting.”<sup>34)</sup> と述べており、かつての情熱は見られない。むしろ、イラチ河の太古の森の静寂の中にこそ心安らかな憩いを感じるのであった。Hemingway がマドリッドに行けばかならず行ったと言われる El Callejon というレストランには、今でも Hemingway Corner があり、彼が好んで坐った隅このテーブルの背後の壁には、最後の旅となったこの旅行中のスナップが幾枚か貼り出してあったが、<sup>35)</sup> そのやつれ方は激しく、別人の様相を呈していた、

1960年、彼の状態は悪化の一途をたどり、妄想や強迫観念に呑まれることもしばしばであった。<sup>36)</sup> Baker も、“In marked contrast to his sixtieth, Ernest’s sixty-first birthday came and went like a shadow. He seldom left the apartment, and set up a card table in a corner of the living room to serve as an office.”<sup>37)</sup> と述べ、前年に比べて彼の状態が悪化していることを伝えている。彼が米国でも権威のある Mayo Clinic に入院したのは11月30日、感謝祭も過ぎた頃であった。高血圧、糖尿病に加えて著しい神経症の症状を呈し電撃療法を受けるという痛ましきであった。

1961年1月には小康を得て一時退院したが、4月に再び入院、6月末退院、そして、7月2日早朝自らの生命を絶った。彼の持論であった“common sense view of suicide” を実行に移したわけである。この間、飛行中の飛行機から飛び

降りを計ったり、又、回転中のプロペラに向って走り出したり、衝動的な行動がしばしば起った。

### III

Hemingway の死後、彼に関する精神分析的な研究が多く出版された。それらを通してこの作家に対するイメージが塗り代えられて来たことは否めない事実である。Hovey が、“If ever a writer had problems over his self-image, he was Ernest Hemingway.”<sup>38)</sup> と述べている如く、この作家は、かなり自意識過剰な側面があったようであり、見栄や外聞に細かい神経をつかっていた。所謂 ‘Hemingway legend’ によって一般に滲透している彼のイメージと、実際の間像の間にはかなりの隔たりがあったことを認めなければならない。作中人物と作家自身の間に相違があるのは当然なことであるが、Hemingway の場合、あまりにも両者のイメージが重複して考えられて来ただけに、このことは重要な意味を持つ。

Hemingway の性格に対する一般的なイメージは、男性的、野性的、磊落、闊達、奔放、反逆、等々であろう。そして、狩猟と闘牛は、これらが集約された彼の商標であった。しかしながら、彼の性格分析からはこれらとかなり異った要素が指摘されている。即ち、攻撃的 (aggressive)、過敏症 (hypersensitive)、気難しき (moodiness, bad-tempered)、神経質 (touchiness)、虚栄心 (vanity)、高慢 (boastful)、自意識過剰 (self-conscious)、我が儘 (childish in his passion)、自分に対する批評などについて怒り易い (thin-skinned)、等々である。

G. Stein との関係が陰悪になったのも、一つには Stein 自身の性格にも理由があったが、それよりも上述のような彼自身の性格にも大きな原因があったと見ることが可能である。又、彼の友人達も、彼の神経過敏で気まぐれな性格が、交友関係

32) *The Sun Also Rises, The Hemingway Reader*, Charles Scribner’s Sons, New York, 1953, p. 208.

33) ‘The Dangerous Summer’, *Life*, Vol. 49, September 12, 1960, p. 75.

34) ‘The Dangerous Summer’, *Life*, Vol. 49, September 5, 1960, p. 85.

35) 筆者は1973年8月ここを訪れた。

36) Cf. A.E. Hotchner, *Papa Hemingway*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1966, p. 263, 269.

37) *A Life Story*, p. 553.

38) *Hemingway: The Inward Terrain*, p. xii.

においていかにしばしば友情と敵意の間を往復しなければならない原因を生み出していたかを指摘している。<sup>39)</sup>

又、1954年1月のウガンダにおける飛行機事故によって受けた肉体的打撃は回復することがなく特に負傷の後、4月にはアメリカ・アカデミー賞受賞、その後、ノーベル文学賞受賞と世界の脚光を浴び、それだけに風当りの方も強く、それは当時の Hemingway には身心共に耐え難いものであった。<sup>40)</sup>

Gurko も、“Indeed he seemed never really to recover from the mishaps and strains of 1954. He became noticeably more irritable. His moods and temper grew more uncertain, and later in the fifties he began displaying signs of paranoia.”<sup>41)</sup>と指摘しているように、偏執病的症状は更に進み、<sup>42)</sup> 前述の如き妄想に脅かされることとなっていく。

Hemingway の不安定な精神状態は、決して彼の老令化によって初めて生まれたものではなく、それは、彼の性格的な問題に加えて、彼自身が悲劇的であったと語っている家庭環境に根ざす不幸な問題<sup>43)</sup> と、戦争体験の後遺症の問題とに溯らなければならない問題である。Philip Young は早くから Hemingway の作品を青年時代の ‘trauma’ として見ている。Hemingway 自身は Young のこの批評に対しては冷淡であったと言われているが、それはこの批評家の鋭い洞察が真実を突いていたからである。Young は、Hemingway にとっては苦手であったようである。

Young は又、*Death in the Afternoon* と *Green Hills of Africa* について、その背後にある作家の異常な精神状態に彼独特の洞察を示している。<sup>44)</sup> 彼の *Death in the Afternoon* の分析は、この作家の死に対する強迫観念 (obsession)

を見抜いているし、*Green Hills of Africa* については、神経質なまでに狩猟を追求していることに対する自己弁解の方が、この本の他の部分より印象的であると述べており、「狩猟がなければ自殺していたかも知れない。」という本人の述懐<sup>45)</sup> を考え合わせると、このアフリカにおける狩猟を扱った作品は、Hemingway の死に対する obsession の書と考えることができる。又、この両書共に1930年代の前半に発表されたものであることも決して偶然の一致ではあるまい。

Hovey も、この両書に対しては厳しい批評を行っており、当時の Hemingway が明らかに逃避的であったことを指摘している。更に又、作家として世に認められることを目指して全精力を打ち込み、充実した徒弟時代を送った彼が、その目的が果された後、何にその精力を注ぎこまねばならなかったかという文脈において議論を進めている。<sup>46)</sup>

1936年に出た *The Snows of Kilimanjaro* における主人公 Harry にしても死に対する obsession を抱いており、ひどい自己嫌悪に陥っている。これまでに述べた伝記的事実を考え合わせると、寡作であったこの時代の彼の苦悩がありありと表われている。

以上のように、この偉大な作家の内面の遍歴を見てくるならば、彼の自殺は起るべくして起ったものと結論づけざるを得ない。

弟の Leicester は、

Ernest had written the family in 1918, after being wounded, that dying was a very simple thing, for he had looked at death and he knew. He said that it was undoubtedly better to die in the happy period of youth, going out in a blaze of light, rather than having one's body worn out and old, and illness shattered.<sup>47)</sup>

39) Cf. Leo Gurko, *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*, Thomas Y. Crowell Co., New York, 1968, p. 36.

40) Cf. Chapter 8, *Papa Hemingway*.

41) *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*, p. 50.

42) 本稿注36参照

43) 拙稿「Ernest Heminway と家庭環境—失地回復を求めて—」, 関西学院大学社会学部紀要第26号, 1973, 参照

44) Cf. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, pp. 95—98.

45) 本稿注18参照

46) Cf. *Hemingway: The Inward Terrain*, pp. 112—113.

47) *My Brother, Ernest Hemingway*, p. 283.



と述べているが、Hemingway が絶えず死の観念に囚われており、あの健康で男性的なマスクの下に悩める魂を秘めていたことを認めなければならない。それにしても Leicester の上述の言葉は何と人生の悲哀に満ちたものであろうか。

Ernest Hemingway は、とにかく61年11ヵ月10日間という歳月を生き抜いた。バラ色の人生の喜びと幸福を十分に味わい、深い自己嫌悪に陥り、

死の観念にとりつかれ、深い悩みを心の奥底に秘め、そして身心共に深く傷つき、最後に自らの生命を絶った。生前事ある毎に自ら語ったといわれる自殺についての彼の言葉が深い感慨をもって思い出される。彼の一生は、病める魂の遍歴であった。若くして名声を勝ち得た彼が、常に自らの identity を求めその極限で模索しつつ送った人生は、決して意味の軽いものではない。